

# 聖地カトマンドウ：諸宗教・観念の複合と変化

石井 溥

東京外国語大学名誉教授

## I. はじめに

ネパールのカトマンドウ盆地は、インド直伝の仏教、ヒンドゥー教と民俗信仰が並存・複合し、人の数よりも神仏の数の方が多いともいわれる。儀礼・祭礼は大変に多く、盆地や集落などを聖なる空間とする観念も様々に発達してきた。本稿では、この盆地の文化・宗教を歴史的に概観しつつ、聖地のあり方や形成について考える。(本稿の概観部分は主に文献 1, 3, 4, 6, 7, 20 参照。)

ネパールは古代と中世にはカトマンドウ盆地(直径 20 ~ 25 キロ程度、標高 1300 メートル前後)とその周辺に限られていた。現在のサイズの国になるのは 1769 年開始のシャハ王朝以降である。シャハ王朝は 2008 年に終り、今日ネパールは連邦民主主義共和国となっている(人口は 2649 万人、2011 年国勢調査)。

ここで、「聖」、「聖地」について筆者の捉え方を示し、またカトマンドウ盆地を「聖地」としてある主な要素について触れておきたい。

「聖」とは、並外れた(超自然的)力、清浄さ、完結性と関係する概念である。また、それらの対極にあるものも「聖」と捉えられることがある。宗教性は「聖」の概念と盾の両面の関係にある。

「聖地」は聖なるものの顕現する(と考えられている)場所で、具体的には、寺院や祠など(を含む一定の範囲)が典型であるが、本稿では、山や川・湖、集落、居住地等との関係も視野に含める。

カトマンドウ盆地を「聖地」としている主な要素として以下の 3 点を考えておきたい。

1. 多くの神仏・寺院・祠などの存在：これは「カトマンドウ盆地に多数の聖地(神々の住まい)がある」という側面である。
2. 神格の配置・構造化による「聖化」：これは「カトマンドウ盆地は聖地である」という側面である。
3. 多数の祭礼・儀礼の存在：これは人々が「聖

地に生きる」側面で、「聖地であること・聖性の確認」が繰り返される。具体的には年中行事、人生儀礼、随時儀礼等があげられるが、本稿では紙幅の制約によりこの側面は大幅に割愛せざるをえない<sup>1)</sup>。

## II. カトマンドウ盆地の宗教状況と聖地(古代～近世・近代)

以下ではネパールの歴史を、古代(4-5 世紀～9 世紀末)のリッチャヴィ王朝時代、マッラ王朝を中心とする中世(9 世紀末～1769 年)、近世・近代のシャハ王朝時代(1769～2008 年)、の各時代の概況を述べつつ、宗教状況と聖地について、代表的な神格や聖地に注目しながら考えたい。なお、現代の変化については章を改めて扱う。

### 1. 古代の宗教状況と聖地

この時代は、主たる史料である 200 余の碑文の言語がサンスクリット語である点等々、インド文明の要素が圧倒的である。ネパール(≡カトマンドウ盆地)には既にヒンドゥー教も仏教も存在したが、どちらもインドから直接入ってきたものである。一方、碑文には非サンスクリット的な地名・官署名などがみられ、土着の言語(文化)が存在していたことも窺われる。

以下、リッチャヴィ時代の碑文から代表的なものを 2 つ(のみ)取りあげ、この時代にカトマンドウ盆地に聖なる存在があり、またこの盆地自体が聖なるものであると考えられていたことを示し、合わせて、より一般的に古代の宗教状況と聖地についてまとめておきたい。

#### 1) マーナ・デーヴァ王の碑文

チャング・ナラヤン寺院所在の古代を代表する碑文で、西暦換算 464 年の銘があり、マーナ・デーヴァ王による東西の平定などが記されている。そ

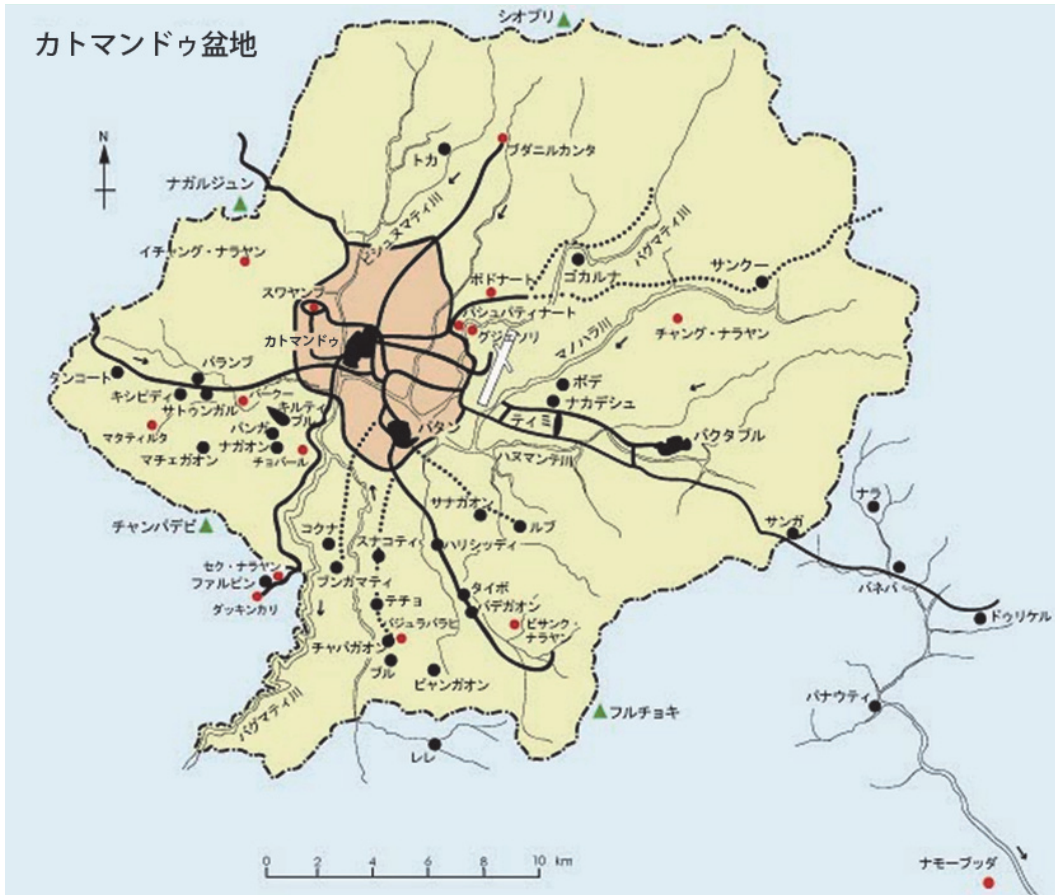


図1 カトマンドゥ盆地地図



写真1 チャング・ナラヤン寺院。18世紀に再建された本堂は2015年4月の大地震での倒壊を免れた。撮影：大村次郷



写真2 チャング・ナラヤン寺院の本堂脇に立つマーナ・デーヴァ王の5世紀の碑（大地震後）。撮影：大村次郷

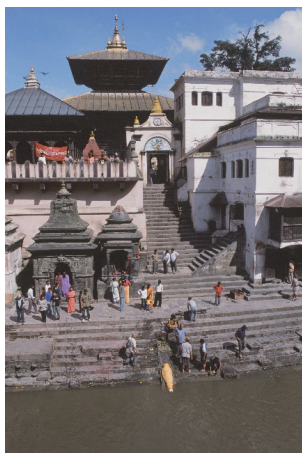


写真3 パシュパティナート寺院(バグマティ川沿い)。  
現在の本堂は17世紀末の再建。  
撮影：大村次郷



写真4 スワヤンブーナート寺院。撮影：大村次郷



写真5 ラト・マチェンドラナート(ブンガ・デヨー)寺院。16世紀のシカラ様式の建築。大震災前。  
撮影：大村次郷



写真6 2015年4月の大地震で壊滅したラト・マチェンドラナート(ブンガ・デヨー)寺院。後方の山は盆地を囲む4山のうち南西にあるチャンパデビ(ディナチョー、Nw=ネワール語)。  
撮影：大村次郷



写真7 パタンの町はずれを行くラト・マチェンドラナート(ブンガ・デヨー)の山車(左寄り奥)。後方の山は盆地を囲む4山のうち南東にあるフルチョキ(フーチョー、Nw)。  
撮影：大村次郷



写真8 父系親族の神ディグデヨー。自然石に花、香などの捧げものが捧げられている。  
撮影：石井溥



の初めの部分に以下のようなヴィシュヌ神への讃がある。「ドーラー山 (dolādri) [チャング] に住み、神々の礼拝供養を受けるハリ神 (hari) [ヴィシュヌ神] は、何にも増して偉大である」(文献7:47)。

同寺院は、バクタプル市の北6キロ、盆地を囲む山々(最高で2700m余)の東の部分から張り出した丘の西端にある。碑文はインドの神格であるヴィシュヌ神の住処をチャングの丘とするが、ここには外から請来されたものを自らの土地に根差したものとして解釈する「土着化」の作用、および山を聖なるものとする観念が働いている。(なお「ナラヤン」は現在のネパール語での発音に近い表記で、本稿では近現代の事物に言及する場合にこの種の片仮名表記を用いる。一方、古代・中世に関してはサンスクリット語の転写でよく使われる片仮名表記[この場合「ナーラーヤナ」]を用いる。また併記する場合には前者をカッコに入れる。いずれもヴィシュヌの異名である。)(写真1, 写真2)

## 2) ジャヤ・デーヴァ王の碑文

バシュパティ<sup>2)</sup> 所在の西暦換算733年の銘がある碑文。リッチャヴィ王統が記されている点で重要で、インドのプラーナ等に基づいた神話的記述や様々な神々への言及もある。神名で頻出するのはバシュパティをはじめとするシヴァの様々な異名であるが、ヴィシュヌ(とその異名)、ブラフマー、ラクシュミー、ナーガ(蛇神)等への言及もあり、以下のように、ネパール盆地の聖性が強調される。「黄金からなるメール山(meru)が聳える如く、神[バシュパティ神]の憩いの地たるこの聖壇[バシュパティ聖域=ネパール盆地]は、雪を頂く七山城(kulācala) [非常に大きな山]に四方を囲まれたるこそふさわしけれ。」(文献7:762)

ここでも山の聖性と、それに囲まれた地域を聖なる場所とする観念が、「土着化」の作用とともにみてとれ、当時のエリート層のネパール盆地観が窺える。

## 3) ヒンドゥー教、仏教の並存・複合

リッチャヴィ時代、王は多くヒンドゥー教を信奉していたが、仏教も保護していた。初期の代表的碑文にはヴィシュヌ神の讃がみられ、中後期にはシヴァ神や仏教の尊格の讃が多い。ヒンドゥー

教や仏教の寺院、僧院等は土地の寄進によって支えられ、寄進地を管理し儀礼を執行するゴーシュティーという組織があったことが6世紀以来の碑文に示されている(ゴーシュティーは今日の「グティ」の前身といわれる)。

200余の碑の2割程度は仏教的で、法華経などを踏まえた大乘の諸尊格(阿弥陀、釈迦、阿閼、世自在、蓮花手、普賢、文殊、勢至など)や複数の僧房(ヴィハーラ、精舎)、仏像、石の小仏塔、布施(施主は王、有力者、僧、尼僧)などへの言及がある(より詳しくは文献3, 4, 7)。

宗教的複合もこの時代からみられ、宗派を区別する意識は少なかった(文献7:739)。

盆地の聖化では、4つのナラヤンの寺の配置を古代以来とする説がある(文献7:597, 686)が、これについては以下のゴーパーラ譜の項で述べたい。

## 2. 中世の宗教状況と聖地

中世は前期(移行期)、中期のマッラ王朝前期(1200～15世紀末)と後期(15世紀末～1769年)に分けられる。前期と中期前半、政治は不安定で、中期後半にピークを迎えるが、後期には3つの小王国に分かれ対抗し、また建築・装飾を競った。

中世前期に進行していた密教化・タントラ化は、民間信仰をとり入れる面をもち、仏教とヒンドゥー教を接近させた。この頃、政治的支配層は弱体で、その庇護を得られない聖職者は民衆へのサービスの方に向かい、両者の相互依存が強まった。インドとチベットを往来する行者等の聖職者は、ネパール人を含めて増加し、請来されるサンスクリット文献は(10世紀以後)急増する。密教の諸尊、女神、観音信仰等がポピュラーになり、儀礼・祭礼も広まった。

一方、この頃から始まったのがムスリムのインドへの侵入で、12世紀には北インドがイスラム化し、13世紀前半には東インドの仏教寺院が破壊されインド仏教が滅ぶ。ヒンドゥー教も圧迫されたが、ネパールでは避難者の流入も多く、仏教やヒンドゥー教の影響は一時強まったと考えられる。ただネパールの仏教は、思想の大供給源を失い、チベットとの関係を深め、変貌していく。

### 1) ゴーパーラ譜にみる中世前・中期の状況

ゴーパーラ譜は、14世紀、ステイティ・マッ

ラ王時代に書かれた王統譜である<sup>3)</sup>。冒頭に神話・伝説、次に古代の記述があるが、主体は中世についての部分で、記録性・信憑性の高い貴重な同時代史料となっている。

神格については全体的にパシュパティへの言及が多く、加えて、スヴァヤンブー、ブグマ（ブンガ村）のローケーシュヴァラ（世自在、観音）、カサウ仏塔、水に横たわるヴィシシュヌなどへの言及もみられる。注目されるのは西ネパールのカサ王がパシュパティ、スヴァヤンブー、ブグマの観音を参拝したとの記述で、この王統譜が書かれた時期以前から、これらの神格・寺院が遠く西ネパールまで聖地として知られていたことが分かる<sup>4)</sup>。

この王統譜にはスティティ・マツラ王がパシュパティ（シヴァ）やブグマ・ローケーシュヴァラを礼拝していたこと、同王を仏陀の生まれかわりとする記述、王が王子の誕生を祝ってラーマヤナを上演したという記述などもあり、宗教・宗派の垣根の低さがみてとれる。また、今日のホーリー祭、インドラ祭、ガタスタプナ（現在のダサイン祭の一部）などの祭・儀礼の古さも窺える。地理的配置による聖化への言及もあり、記述どおり古代の早い時期からあったかには疑問符がつくが、14世紀には4ヴィシシュヌを配置して盆地を聖化する方式が確立しており、それが古い時代からあったと認識されていたことが分かる。今日、神仏の四方への配置は、4ガネシュ、4バラヒ、4ピンセン、4観音等々がみられる。それらのうち、あるものは古代からあり、中世後期にはかなり出揃っただろうと推測される。

## 2) ネーパラー・マーハートミヤ（ネパールの偉大さ）<sup>5)</sup>（写真3）

ネパールで書かれたサンスクリット語の文書で、作成時期は9世紀、13世紀など諸説がある。第1章では「聖地ネパールは神々の住処・聖地のなかで最高である」とカトマンドゥ盆地の聖性が強調され、パシュパティの起源が次のように述べられる。（要約）《シヴァ神とパールヴァティー女神はカーシー（ベナレス）と美しいカイラーサを去ってネパールのヴァグマティー川のほとりの花咲く森にやってきて大変に満足し鹿の姿になり「パシュパティ（獣の主）」と呼ばれるようになった。ブラフマー神やヴィシシュヌ神などが探しにき

たが戻らず、それらの神々がつかんで欠けた鹿の角がシヴァ・リングとなった。》

第8-12章は、カトマンドゥ盆地の水流を堰き止めた山（亀）の姿をした魔神をクリシュナが切って盆地を干拓した話を含む。他の諸章では、ヴィシシュヌや仏陀や様々な女神も言及されるが、今日8母神として知られる女神の名称はみられない。

本文書はシヴァ神を中心に様々な神格の振る舞いや起源等をネパールに引きつけて語り直す神話で、「土着化」「ネパール化」をとおして盆地を聖化・称賛し、巡礼の手引きともなっている。盆地干拓譚の部分は、次のスヴァヤンブー・プラーナと通じる面をもち、盆地固有の伝承を踏まえ想像を働かせた話となっている。

## 3) スヴァヤンブー・プラーナ<sup>6)</sup>（写真4）

インドの宗教文献にならい「土着化」の想像力を強く発揮したネパール中世の文献の代表で、15-16世紀以来、多数の写本・バージョンがある。その骨子は以下のものである：《ネパール盆地は昔は湖で、そこに過去仏の如来が次々に訪れ住む。それぞれの如来の時代に、スヴァヤンブー仏誕生の予言、その出現、文殊菩薩の中国からの到来（とスヴァヤンブー礼拝）と湖の（剣による）開鑿等があり、スヴァヤンブーが塔に祀られるようになった》。

この話は、スヴァヤンブー仏を過去仏（釈迦以前に存在したとされる仏）や文殊菩薩より遥かに偉大とするとともに、仏教的な盆地開闢（干拓）譚となっている。また過去仏はそれぞれこの盆地の周りの4つの山に長く留まったとされ、盆地がスヴァヤンブーを中心に4方を聖山によって固められた聖空間とされている。

この話はスヴァヤンブーを一般の人々に浸透させるのに大いに寄与したと考えられるが、この仏の名はそれ以前から内外に響いていた。カトマンドゥ市の西はずれのスヴァヤンブー（スワヤンブー）の丘は、古代の碑文等もある古くからの聖地で、半球形の仏塔の起源は明らかでないが、早くから祀られてきた大乘の仏スヴァヤンブーが密教化を経て本初仏スヴァヤンブーとなり、そこに様々な伝説が加わってよりポピュラーになったと考えられる。

4) プンガ・デョー<sup>7)</sup> (写真5, 写真6)

プンガ・デョー（プンガの神）は、現在、ラト・マチェンドラナートともいわれている神格（仏）で、プンガ村（プンガマティ。カトマンドゥの南約10kmのネワール<sup>8)</sup>の村）あたりで雨の神として古くから尊崇されていた。この神格はかなり早く（おそらく古代）に観音と習合し、中世前期には、ブグマ・ローケーシュヴァラ（ブグマの世自在）、アヴァローキテーシュヴァラ（観自在）、カルナーマヤ（大悲観自在）等々と呼ばれ、既述のように盆地外まで名が轟いていた。中世中期末までには、この神格はマツェンドラナータ（シヴァ派の行者に由来する神格）と習合しており、王の尊崇も厚く、17世紀にはパタン（ラリトプル）にも祀られ、一つの仏（神）像がプンガ村とパタンを半年ごとに行き来するようになった。今日その信仰は盆地へのマツェンドラナータ招聘譚とともに広まっている<sup>9)</sup>。その話の一方の主役であるゴラクナータ（ゴラクナート）は、シャハ（ゴルカ）王朝の発祥の地ゴルカの名の由来となった神格で、この王朝との関係が深い。上記招聘譚はシャハ王朝の下で流行し、またシャハ諸王はマチェンドラナートの大祭への参加を慣例としていた。4-5月頃の大祭には無数の儀礼が行われ、また高い（それより高い建物を建ててはいけないといわれる）山車がパタンの町と周辺を何日もかけて巡行し、多くの参拝者・見物人を集める。巡行が滞るのは王と国にとっての凶兆で、また祭りへの参加は王に正統性を与えるとされる（写真7）。

この神格はシヴァ、クリシュナともされ、男神・女神の両側面をもっているともいわれる。様々な要素が複合するこの神格は、多くの寄進地・グティ、儀礼分担者を擁し、時代の動きを敏感に反映して変貌しつつ政権と民衆に密着してきた。

5) 聖空間としてのカトマンドゥ盆地

上記2)、3)で扱ったような文献は、特定の神格の称揚を核としつつ、様々な寺や聖地の起源なども述べる。これら「土着化」の傾向の強い文献や伝承は、一方で寺院・聖地の状況を反映し、他方、新しい寺院・聖地の誕生や整備・改変を促した。

中世後期、文書や伝承中の聖地のイメージと現実の空間配置は、ある程度対応していたと考えられる。

盆地は無数の神仏の居処であった。在家妻帯「僧」の住居はそのまま寺・僧院で、一方、集落、川辺、合流点、山・丘等々の多くの場所には無住の寺院・祠・聖所がみられる。土着の超自然的存在も多様で、民俗の特徴を保つものがある一方、大宗教と融合し元来の姿の見えにくくなっている場合もある。

盆地全体や多くの寺院・聖域は、主要神格を中心に、他の神格を周りに置くマンダラの形をとっている。特定（一群）の神格の四方への配置はその一環で、中世には八方（等）への配置へと展開する。8母神による聖化はその代表で、様々なレベルで具体化される。寺院では軒を支えるほうづえの彫刻に表現され、集落や盆地では周囲に当該神格の寺や聖所が配される（文献5, 12）。8母神はヒンドゥーの男神の配偶神の名前をもつが、付随する儀礼には仏教司祭も関わるなど、宗教宗派の区別は希薄である。地域や盆地の周囲に8母神（等）が割り当てられている点については、背後に何らかの権力関係が想定されるが、その点については別の考察が必要である。

ネワールの集落では、2つの部分が結合して完結した宇宙を作る双分構造がみられる。この盆地でのその展開は中世についておぼろげに辿れるが、より一般的・基層的な面を考える必要がある。

3. 近世ネパールの宗教状況と聖地

1) シャハ王朝創始の影響

1769年、シャハ（ゴルカ、グルカ）王朝が盆地を含む多くの地域を征服し、ほぼ現在の大きさとなるネパール王国を建てた。この王朝は軍隊、官僚制や王族、貴族の生活を維持する土地を必要とし、従来、寺院などを支えていた土地がそれに振り向けられた。征服者側は山地のヒンドゥー教徒で、大寺院やある種の祭礼は尊崇・保護し<sup>10)</sup>、新しいヒンドゥー寺院も建てた。だが、その宗教・儀礼指向は、盆地住民のネワールに比べれば、はるかに低い。また彼らの母語は印欧語系のネパール語で、ネワール語とは系統が異なる。しかも彼らには、征服戦の際に抵抗したネワールへの警戒心があった。被征服者であるネワールの文化・言語・宗教は抑圧される傾向があり、衰退する寺院や儀礼組織もあった。

## 2) 後期王統譜

19世紀頃には複数の王統譜がネパール語で書かれ流通した。内容は19世紀までの歴史で、古代・中世の部分には神話・伝説が多く、史実の面では注意を要するが、書かれた当時の世界観・政治史については興味深い資料で、聖地に関しても様々な記述がある。以下、聖地・聖化に関わる点を手短かに述べる。

## (1) ライト譜

D. ライトによる英訳（と序文等）がある「仏教系」王統譜（文献24）。冒頭の開闢神話部分は、明らかにスヴァンブー・プラーナを踏まえているが、短縮や諸名称の変更、話の流れの改変などもみられる。また、ヴィシュヌ、クリシュナによる盆地開鑿の話も含む。カトマンドゥ盆地は須弥山やヒマラヤと関連づけられ聖性が強調される。ナレンドラデーヴァ王（と次の王）の時代の個所では、マツェンドラナータとその祭の起源等が語られる。

## (2) バドマギリ譜

B.J. ハスラットの本（文献13）に英訳が含まれる。開闢神話部分には中世の文献・伝承を踏まえつつ改変した仏教系とヒンドゥー教系の両方のバージョンが含まれ、相互に異なっている。ヒンドゥー教系では様々な神格を4つの名前と姿で示す傾向が強く、また、9ドゥルガーや64のシヴァ神など、数によるセットが強調される。「土着化」の記述も顕著である。

## (3) バサ（バーシャー）譜

ヒンドゥー系王統譜（文献14, 17）。作者は不明で、歴史部分も多くは神話・伝説で色どられている。冒頭では（盆地開闢神話でなく）ヒンドゥーの宇宙生成論、世界の構造が語られる。そして、ヒマラヤ地域が大陸のなかで最も優れた閻浮提にあるとされ、そのなかの聖地ヴァーラーナシーが注目され、パシュパティ地域がそれより4倍も優れ、そこにパシュパティナート神がやってきたと述べられる。多くの聖地の生成譚も述べられ、64のシヴァ・リング、232の副リング等、数・配置による聖化へのこだわりも強い。

## 2) 王統譜からみる近世の聖地

後期王統譜の神話部分はみなネパール（カトマンドゥ）盆地を聖地と捉えるが、仏教的なものとは異なるだけでなく、仏教系王統譜同士、ヒンドゥー系王統譜同士間にも差異がある。インドの聖地が強く意識される一方、盆地とそのなかの聖地はより聖なるものとされる。

後期王統譜は（ゴーパーラ譜に比べれば）宗教色が強く、また数と配置による聖化の記述が増加・複雑化する。この傾向はヒンドゥー系王統譜に強いが、記述が実在の聖地に対応するとは限らず、構築は時に観念的なものにとどまり、また様々な観念が輻輳する。

## Ⅲ. 近現代の状況

## 1. 近代化の中で

20世紀後半から現在まで、ネパールは政治的に大きく変わってきた。1964年にはグティ公団が設立され、諸寺院・聖地に付属してきた土地がその管理下に置かれた。大寺院の多くはその下で存続し続けているが、その管理下でない中小寺院も多く、地域の経済力や関心の所在によって盛衰の差があらわれる。

1959年のチベット動乱以来のチベット難民の流入はカトマンドゥ盆地でのチベット仏教寺院等の増加をもたらしている。他方、20世紀前半から再導入された上座部仏教も1990年の民主化を経てさらに盛んになっている。イスラムのモスクや他の諸宗教・宗派の施設も様々な存在し、キリスト教徒や同教会の増加は顕著である。ネパールは現憲法で「世俗国家」とされた。これは脱宗教というより諸宗教を差別しない方向性を示したものであるが、依然として改宗は禁止され、また政権による宗教政策の相違や民衆の運動を受けての揺れもみられる。宗教・聖地の多様化がこれからも進むかどうか予断を許さない。

観光は、宗教・聖地、建築・美術等の研究や世界遺産の指定・整備なども含め、政策面でも力が入れられてきた。グローバル化やIT化のもと、人里離れた聖地まで観光の対象として世界に売り出されつつあり、聖なるものの境界が曖昧になる面もある。一方、盆地の環境汚染は深刻で、世界遺産等への影響も心配され、さらに2015年4月25日の大地震は別次元の配慮を必要とする被害



をもたらししている。

## 2. 村の調査からみた「聖地」

ここで視点を変え、私が調査をしてきたカトマンドゥ市西郊の村で、人々がどんなところを聖地とみなしているかをみてみたい。

バシュパティ、スワヤンブー、チャング・ナラヤン等の大寺院は、機会があれば村人も訪れる、それなりの尊崇対象である。突出しているのはブンガ・デョー（ラト・マチェンドラナート）で、サンルー・グティとよばれる月一度の参拝のためのグティ（儀礼執行組織）がこの村だけでも複数ある。近年、活動の衰退もあるが、この神格への信仰が盆地の村落部まで、組織化を伴いつつ浸透していることが窺える。

インドのカーシー（ヴァーラーナシー、ベナレス）やバドリナートなどは、経済力・宗教心のある村人の巡礼対象となっている。そのような巡礼は村では何年かに1回の非日常的なもので、戻った人は村人を招いて大宴会を行う。

村の人にとって一番大切なのは村の主神「ビシュヌデビ」女神<sup>11)</sup>で村内に寺があるが、その母とされる同名の女神の聖所が村はずれの川の合流点にあり、大祭の際にミコシが集まり数々の儀礼が行われる。この村はずれの女神は自然石であらわされ、最近まで露天のままであったが、これを土着の母神の変化したものとも考えることも可能であろう<sup>12)</sup>。

村の人々は複数の神格による盆地の聖化には無関心であるが、一方（グッチョウの研究によれば）カトマンドゥの仏教司祭カーストの人々は、この村の女神を（他の名称のもと）盆地を3重に囲む24（8×3）の母神のひとつとし礼拝の対象とする（文献12: 22）。彼らと村人の間には、神格の名称や位置づけにかなりの差異があるのである。その他、村々の主神の多様性をはじめ、盆地内の地域差・階層差は様々な面で存在する。

ネワール社会に共通する要素のうち、土着の神格の代表は父系集団の神ディグ・デョーである。この神格は野原や田畑の自然石などであらわされ、その祭祀はネワールの民俗信仰の基層を窺わせる（写真8）。

## IV. 結語

### 1. 聖化の観念と聖地の変化

宗教の並存・複合や盆地自体を聖地とする観念は古代に既に存在したが、聖地構築度は中世に比べ限定的であった。

中世においては聖化の観念と具体的な寺院建築・造像・彫刻などが平行進展し、両者の間にフィードバックがあった。また密教化、祭礼・儀礼の増加、位置・配置などによる聖化、「土着化」が進んだ。

近世、カトマンドゥ盆地の文化は国全体では部分的となり、権力による支持は限定・選択的となった。繁栄を続ける寺院・聖地がある一方、衰退したのも少なくない。多くの王統譜の出現はこのような変化への反応の一環で、この盆地を聖地とする観念が様々な構築され輻輳したが、言説上のものに留まる傾向もあった。

今日の変容には、従来からの変化の継続の面がある一方、全世界と対峙する新しい側面がみられる。

### 2. 聖地の形成：基層文化と文化要素の堆積

カトマンドゥ盆地の文化は、土着的要素が、圧倒的なインド的要素とチベットからの一定の影響のなかで、作用・変容しつつ形成されてきた。

「聖地カトマンドゥ」の形成では、この盆地自体の存在が大きな役割を果している。「土着化」は外来の諸要素を在来のものとしてしまう作用であるが、この盆地の位置・地形・環境はそれを様々な面で可能にしてきた。外来の聖なるものはネパールの聖なるものとして、時に在来の要素と習合しつつ、それぞれの聖所を占めたのである。

世界に広くみられる民俗的な要素のうち、母神信仰、双分構造、自然石崇拜等はこの盆地にも根を下ろしていたと考えられる。ヒンドゥー教、仏教はともにネパールに入る前から各地の民俗的要素を取り込んで変容していた。それらは盆地において（原ネワール語を含む）基層的要素と接触し「土着化」作用を受け、また在来の諸要素を変化させた。聖地を含むこの盆地の独自性は、それらの繰り返しのなかで形成されてきたのである。

※ 本稿は2016年6月25日の第37回雲南懇話会「南アジアの聖地と山岳信仰」での講演にもとづ



いている。企画を担当された鈴木正崇慶應義塾大学名誉教授、雲南懇話会幹事の前田栄三氏、講演および本稿で写真を使わせて下さった写真家の大村次郷氏に厚くお礼申し上げる次第である。なお、講演時の写真については、雲南懇話会のウェブページ (URL : <http://www.yunnan-k.jp/yunnan-k/>) をご覧頂きたい。

## 注

- 1) この点の概略については文献1を参照されたい。
- 2) バシュパティナータ (ナート) 寺院の所在地。カトマンドゥ市街の東約4km、ヴァグマティー (バグマティ) 川の屈曲部の南の地域。
- 3) 文献23. *vaṃśāvalī* 「王統譜」は伝承・歴史書。個別の王統譜に言及する場合には「～譜」とする。中世の王統譜はごく少数である。
- 4) 11世紀、13世紀にもインド、チベットの学僧によるスヴァヤンブーやブングの観音への参拝・言及の記録がある (文献6, 19)。
- 5) 文献9にはサンスクリット語のローマ字転写とその英訳が解説とともに載っている。
- 6) 本項は主に文献6, 8, 10, 11による。
- 7) 本項は主に文献6, 15, 16, 19, 20, 21による。
- 8) カトマンズ盆地を故地とする民族。人口は132万 (2011年国勢調査)、母語はチベット・ビルマ語系のネワール語。
- 9) 招聘譚には仏教系とヒンドゥー教系がある。伝説集、民話集や口承伝承まで含めれば無数のバージョンがあると思われ、古くは19世紀の王統譜にみられる。話の骨子は以下のようなものである：《盆地に飢饉が続き、その理由はゴラクナータが蛇王たちの上に座っているせいであるとされる。解決には、その師であるマツェンドラナータを遠方 (現在のアッサム) から呼んでくる必要があるとされ、王が密教行者等と赴きマツェンドラナータを連れてくる。ゴラクナータはその師を見るや立ちあがったので、蛇王は解放され雨を降らせるようになった。マツェンドラナータは神 (仏) 像に祀られ、王と王師は神の左右の足に合体した。》
- 10) インドラ・ジャトラ (祭) での王によるクマリ (少女の生き神) の礼拝、マツェンドラナータ (マチェンドラナート) 祭への王の参加、町や村の大祭への補助金等には被征服者の懐柔の意味もあったと考えられる。
- 11) 「ヴァイシュナヴィー」のこの地域でのなまりと考えられる。なお文献2参照。
- 12) カトマンドゥ盆地の母神信仰はごく古いであろう。石像には3-4世紀とされるものがあり (Slusser vol. 2, plates 545-51)、5-6世紀にインドでまとめられた「デーヴィー・マハートミヤ (女神の偉大さ)」は、ネパールでは中世以降の女神信仰の隆盛につながったと考えられる。なお、現在みられる寺院建築や木の彫刻はほとんどが14世紀末以降のものであり、8母神の像も新しいものが多い。

## 参考文献

(v.s. = vikram samvat = ヴィクラム暦, n.s. = nepāl samvat = ネパール暦)

- 1) 石井溥・大村次郷：ヒマラヤの「正倉院」ーカトマンズ盆地の今。山川出版社，2003。
- 2) 石井溥 (立川武蔵編)：カトマンズ盆地村落における「ビシュヌデビ」女神とその祭祀 (ヒマラヤ地域における仏教タントリズムの基層に関する研究 [科研基盤B報告書]) 2006: 1-22。
- 3) 石井溥 (下田正弘・奈良康明編) ネパールの宗教と社会 (仏教出現の背景 [新アジア仏教史01]) 佼成出版社，2010: 331-65。
- 4) 佐伯和彦：ネパール全史。明石書店，2003。
- 5) 立川武蔵：女神たちのインド。セリカ書房，1990。
- 6) 田中公明・吉崎一美：ネパール仏教。春秋社，1998。
- 7) バジラーチャリヤ D (佐伯和彦訳)：古代ネパール史料ーリッチャヴィ時代の銘文集成。明石書店，1999。(文献22の和訳)
- 8) 中村元・増谷文雄 (監修)：仏教説話体系14 伝説と民話 (1)。すずき出版，1982。
- 9) Acharya J. *The Nepāla Māhātmya of the Skandapurāṇa: Legends on the sacred places and deities of Nepal*. Nirala Publications, New Delhi, 1992。
- 10) Bajracharya MB and W Smith. *Mythological History of the Nepal Valley from Svayambhu*

- Purana*. Avalok Publishers, Kathmandu, 1978.
- 11) Brinkhous H. The Textual History of the Different Versions of the <Svayambhūpurāṇa> in G Toffin (ed) *Nepal: Past and present*. Sterling Publishers, New Delhi, 1993: 63-71.
  - 12) Gutschow N. *Stadtraum und Ritual der Newarischen Städte im Kathmandu-Tal*. Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart, 1982.
  - 13) Hasrat B.J. *History of Nepal: As told by its own and contemporary chronicles*. Hoshiarpur, The author, 1970.
  - 14) Laṃsal N. *Bhāṣā Vaṃśāvalī*, bhāg 2. Purātatva Vibhāg, Nepāl Rāṣṭriya Pustakālaya, Kathmandu, 2023 v.s. (1966). (ネパール語)
  - 15) Locke J. Karunamaya: *The cult of Avalokitesvara-Matsyendranath in the Valley of Nepal*. Sahayogi Prakashan, Kathmandu, 1980.
  - 16) Owens B. The Politics of Divinity in the Kathmandu Valley. [PhD dissertation. Columbia University] 1989.
  - 17) Pauḍel N. *Bhāṣā Vaṃśāvalī*, bhāg 1. Purātatva Vibhāg, Nepāl Rāṣṭriya Pustakālaya, Kathmandu, 2020 v.s. (1963). (ネパール語)
  - 18) Pruscha C (coordination and production). *Kathmandu Valley: The preservation of physical environment and cultural heritage - A protective inventory*. vols. 1 & 2. [prepared by HMG in collaboration with UN and UNESCO], Anton Schroll & Co. Vienna, 1975.
  - 19) Roerich G. *Biography of Dharmasvāmin: A Tibetan monk pilgrim*. K.P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1959.
  - 20) Slusser MS. *Nepal Mandala*. 2 vols. Princeton University Press, Princeton, 1982.
  - 21) Tuladhar-Douglas W. *Remaking Buddhism for Medieval Nepal: The fifteenth-century reformation of Newar Buddhism*. Routledge, London, 2007.
  - 22) Vajrācārya D. *Licchavikālkā Abhilekh*. CNAS, Tribhuvan University. Kathmandu, 2030 v.s. (1973). (ネパール語)
  - 23) Vajrācārya D and KP Malla. *The Gopālarājavaṃśāvalī*. Franz Steiner Verlag, Wiesbaden, 1985.
  - 24) Wright D. *History of Nepal*. Antiquated Book Publishers, Kathmandu, 1972 (1877).

## Summary

### Sacred Kathmandu: From a Historical Perspective

Hiroshi Ishii

Professor Emeritus, Tokyo University of Foreign Studies

There are numerous sacred places in the Kathmandu Valley, Nepal. They range from Hindu and/or Buddhist temples to open-field plots with crude stones (representing *digu dyah* or an agnatic-group deity). Deities of different origins converge on an image or an object in some cases, making it difficult to discern between various beliefs.

Hindu and Buddhist deities, after introduced to Nepal (or Kathmandu Valley), acquired their proper places to settle, which people often considered holier than their original abode. For example, Pashupati along the river Bagmati was chosen as the seat for Shiva and was said to be holier than Varanasi.

Various theories intended to make the Kathmandu Valley sacred. To place Narayan (Vishnu) temples in four directions of the Valley is a typical example. This kind of theorization seems to have begun in ancient times, flourished in the mediaeval period and continued to the early modern era. Some such theories of the latter era remained as mere theories found in written texts. Seen from the village level, such theories mainly constructed by urban elites look foreign to villagers' daily practices and belief.

Nepal has been changing drastically after 1950. The increase of religious diversity has given rise to new sacred places, secular ideas has been gaining ground, and metamorphosis of sacred places began due to various reasons including the spread of tourism.